

三島由紀夫 『仮面の告白』 論

—〈告白〉と二つの主体—

中
村
佑
衣

要旨

本稿は近代における〈告白〉と主体の生産に焦点を合わせ、『仮面の告白』（河出書房一九四九年七月）の作者三島由紀夫ならびに語り手「私」の主体と〈告白〉を、ミシェル・フーコーの『知への意志』（原著一九七六年）を援用して論じた。

従来の研究では、一つ、〈作者―作品〉間で作者が作品に、あるいは作品が作者に与える相互の影響を重視し、二つ、作者と語り手「私」を渾然一体の存在と見なし、三つ、〈告白〉の内容の真偽性や動機、手段、因果など、告白者自身へと収斂される論じ方の傾向が見られる。それらと異なり、本稿は〈性の告白〉という作品形式の選択自体が同時代の文壇の要請に応えるものと解釈し、〈告白者―受取手〉間、及び〈告白者―社会〉の関係性に論点を設定した。

具体的にはまずフーコーが『知への意志』で述べた、西洋の近代社会における〈性の告白〉と告白者の主体の生産の機構が、『仮面の告白』発表当時の日本においても成立していたことを指摘し、フーコーの『知への意志』の本作品への適用の妥当性を述べた。続いて本作品における作者三島由紀夫の主体の生産に照明をあて、〈性の告白〉という作品形式の選択自体が同時代の文壇の要請に応えたものだと言及した。フーコーが指摘した〈告白〉における受取手の優位性は、『仮面の告白』を巡る文壇評価にまさしくあてはまる。私小説のような作者の〈告白〉を期待する文壇の態勢の中で、『仮面の告白』を作者の〈告白〉として当時の文壇が認識した結果こそが、『仮面の告白』を作者の〈告白〉として規定して、〈告白〉を完成させ、三島由紀夫という作家像を生産したのだ。

そして最後に、語り手「私」の〈告白〉と主体の生産を論じた。〈告白〉における受取手の存在の不可欠性と、受取手の「裁決機関」としての役割をフーコーは指摘した。「私」の〈告白〉においても「私」が受取手として想定する読者の存在が不可欠であり、「私」は読者を納得させるような〈告白〉を構成し、語らねばならない。それゆえ「私」の語りが、読者の納得を得るための誘導的な叙述構成をしていることを述べた。

「私」は〈告白〉を叙述することで、「私」が「私」を認証し、読者に対して賛同と承認を求めた。戦時下から終戦後にかけて、貧弱な身体であったために兵士として戦わず、また異性に対する肉欲が湧かないことから結婚・産児も叶わない「私」は、社会と違う〈他者〉から「私」が「私」であるという主体を暗に否定されていたとらえられる。そのような経歴の「私」において、自

身の存在を自問し納得して、〈他者〉に存在を承認させることは重要な課題であったと言える。そのように、「私」の〈告白〉の目標は、アブノーマルな性指向の持ち主である「私」の一面とその内情としての「私」の思考の集積を余すところなく掬いあげて、「私」という主体を形作り、告白者・受取手の双方がそのことを承認することだと本稿は考察した。

「私」が想定する読者の反応は本作品の叙述には含まれておらず、その観点から言えば、「私」の〈告白〉は受取手の承認を待つ生成途中の〈告白〉だと見なされる。しかし現実世界における読者が「私」の背後に作者の姿を透かし見ることで、「私」が想定する読者の代替を果たし、作者の主体を承認したと同時に「私」の〈告白〉をも承認したと言えるのだ。これこそ、〈告白者―受取手〉間に生産された『仮面の告白』の〈告白〉の機構である。

語り手「私」の主体は作者三島の主体同様、〈告白〉を巡って読者との関係性の中で生産される告白者の主体である。『仮面の告白』という一つの〈告白〉の叙述に見出された二つの主体。本稿はそのように視点の置き換えによって見出される『仮面の告白』の〈告白〉の機構を論じた。

1 はじめに

三島由紀夫の『仮面の告白』(河出書房一九四九年七月)に対する同時代から現在に至るまでの評価は、^{リアリティ}寫作の差異はあれども一貫して〈告白〉に重きを置く。¹〈告白〉がもつ人々への影響力はミシェル・フーコーが『性の歴史I知への意志』(原著一九七六年)で指摘しているが、本稿ではそれが日本文学である『仮面の告白』においても適用可能であることを確認し、その論理を基に〈告白〉と主体の生産を論じる。

『仮面の告白』は虚構の告白体小説として評価されるようになった現在²においても、語り手の「私」と作者三島が渾然一体のものとして論じられることが少なくない。理由として、本作品の内容に三島の実体験を基にしたエピソードが多く、また作品タイトルからして仮構や虚構の意をもつ「仮面」の語が「告白」の真实性を打ち消し、解釈のゆとりをもたせていると説明されることが多い。

だが「仮面」の語が本作品の〈告白〉の真实性に亀裂を生じさせるといふ論理は、「告白」が真実を示す語であるという信頼を前提としている。確かに一般的な認識として〈告白〉は真実を述べる行為だ。だが初版刊行時に付された月報で、作者自ら「告白の本質は「告白は不可能だ」(『仮面の告白』ノート)河出書房一九四九年七月『全集二十七巻』p.190)³と述べる本作品に、「告白」への信頼を前提とした解釈は妥当であろうか。『仮面の告白』における〈告白〉行為は小説が本来もつ創作性^{フィクション}、すなわち虚構を前提とした文学の形式としてのものであり、一般的な〈告白〉行為と相違することを三島は宣言しているのである。

フーコーが『知への意志』で分析したとおり、西洋では近代までに〈性の告白〉が告白者の主体性の獲得に値すると人々に認識されるほど、〈告白〉は西洋社会での影響力を強めた。その過程において精神分析や性科学が果たし

た役割は大きい。同時に西洋近代は、自伝など〈告白〉の文学が生まれ、人が自身について積極的に〈告白〉するようになった時代でもある。フランス自然主義の影響下に独自の発展を遂げ、私小説という〈告白〉文学を生み出した日本も同様だ。『仮面の告白』に先立つ昭和前半頃までの文壇では、私小説は「近代文学」の象徴として扱われていた。このように西洋・日本の違いはあっても、それぞれの〈近代〉で新しく〈告白〉文学が生まれたのである。このような文学の変遷と〈近代〉における〈告白〉と主体確立の要請の機構を踏まえた上で、本稿は『仮面の告白』を分析する。

本作品の主体確立に関しては、佐藤秀明が「自己を語る思想―『仮面の告白』の方法」(『国語と国文学』二〇〇六年十一月)と「作者」についての提起―『仮面の告白』を例として―(『日本近代文学』二〇〇七年十一月)で既に、作者と物語世界内の「私」という二つの主体を個々に論じている。佐藤の論では〈告白〉の真理性を前提に、セクシュアリティへの言及が主体確立に繋がったとしている。先の〈告白〉の真理性を打ち消す「仮面」の通説や、佐藤の「仮面」イコール同性愛者としての一面としてとらえ真理性を語るための装いとする従来論と異なり、本稿は〈告白〉への前提的な信頼にまず疑問を呈することで〈告白〉の真偽性を問う論から離れ、俯瞰的に〈告白〉を論じる方針をとる。加えて、同性愛の〈告白〉を語ることで主体が現出したとする佐藤の論と異なり、本稿はフォーコーの『知への意志』を援用し、〈性の告白〉という作品形式の選択自体が同時代の文壇の要請に応えるものだと解釈し、〈告白者―読者〉間に生産された・またはされつつある『仮面の告白』の〈告白〉と二つの主体を論じる。

2 〈近代〉の西洋／日本で求められた〈告白〉

十八世紀フランスでは、ルソーの『告白』(一七六五―七〇年執筆)を一つの契機とした自伝文学が生まれた。時をほぼ同じくしてイギリスではギボン、アメリカではフランクリンの自伝も刊行され、西洋において〈告白〉文学が新たに〈近代〉の象徴として生み出された。例えばフランスでは自伝文学の確立以前にも、貴族など上流階級の公的生活を叙述した回想録や、宗教的要請に基づき同じ信仰心を有する仲間に向けた教育的意図をもつ自伝的作品があった。ルソー以降の自伝文学はそれらと異なり、平民階級の作者が自身の生涯や内的世界を叙述し、社会の中の〈個人〉という考えの下、自己探求をする傾向をもつ。ルソーの『告白』の冒頭、「わたしはかつて例のなかった、そして今後も模倣するものはないと思う、仕事をくわだてる。自分とおなじ人間仲間に、ひとりの人間をその自然のままの真実において見せてやりたい」(桑原武夫訳『告白』岩波書店一九六五年三月刊)の叙述は、そのことを象徴している。

このように半生を振り返り〈告白〉することで、自身の個性を発見し、自己を確立しようとする動きが〈近代〉の文学に生まれたのである。ルソーを一つの契機として生まれた自伝文学の流れはロマン主義に引き継がれ、内的世界や心情の吐露をより重要視するようになる。それより後には、ブルーストの『失われた時を求めて』(一九一三―二七年)のように、作者イコール語り手の「私」とは言い切れない、しかし作者と語り手の「私」に多くの共通点が見出されるような文学作品が生み出される。

フランスの哲学者、ミシェル・フーコーの『知への意志』(渡辺守章訳、新潮社一九八六年九月邦訳刊行)は、〈性の言説〉が発生する〈場〉から、〈性の真理〉や〈性〉自体があたかも自明のこととして現前して人々に認識される

ようになった過程に言及し、よって〈性の言説〉をコントロールする権力の機構を指摘する。「西洋世界における人間は、告白の獣となった」(p.71)とフリーコーが述べたように、現在に至るまで続く、人々の異常なまでの〈告白〉に対する信頼を浮き彫りにしている。そして〈告白〉が真理と結びつき、〈性の告白〉が告白者の主体の獲得のための手段となっていた過程には、サドの『ソドムの百二十日』(一七八五年)、自伝風の好色文学とされる著者不明の『我が秘密の生涯』(一八八四〜九四年)(p.30)や、自伝文学などの〈告白〉する文学が含まれてこまれているのだ。

フリーコーは近代における文学の変化を以下のように指摘する。

勇氣や聖性の「試練」をめぐる英雄的な、あるいは神秘的な物語に集中していた、語り・聞くという快楽から、告白という形式そのものが手の届かぬものとしてちらつかせている真実を、自己の深奥から、言葉の間に、立ち昇らせるといふ際限のない努力を使命とする一つの文学へと、人は移行した (p.77)

また「人は、他の人間では不可能な告白を、快楽と苦しみのなかで、自分自身に向かつてし、それを書物にする」(p.77)とも述べている。フリーコーによればこのような文学の傾向は「移ろいやすい多数の印象を通じて意識の根本的な確実性を解き放つてくれる、自己の検討」(p.78)から自己の真理、すなわち主体を求めようとするものであり(近代)の重要な一つの傾向として認めている。

一方、『仮面の告白』が書かれた一九四九年頃の日本の文壇においても、〈告白〉は重要な位置を占めていた。奥野健男は「伊藤理論と平野公式——近代日本文学への原理論」(『近代文学鑑賞講座二十五』角川書店一九六〇年五月)において、私小説論の方向性を形作った代表者、小林秀雄(『私小説論』一九三五年)と中村光夫(『風俗小説論』一九五〇年)の他、平野謙(『私小説』一九四七年、『私小説の二律背反』一九五一年)、伊藤整(『小説の方法』一九四八年)らを挙げ、これら近代日本文学を論じる戦後批評が「何れも私小説を日本の近代文学の主流としてと

らえている」ことを共通点に、一様の傾向を示していると述べた。「日本文学論というよりも、むしろ私小説論と言った方がよいほど」だと奥野が叙述したように、戦後すぐの文壇においては、西洋を理想とした近代化を果たそうと模索する中で、〈近代的自我〉の確立に至れなかった日本の私小説という認識が主流であり、〈告白〉の仕方によっては日本も西洋のような主体性を確立することができたはずだという〈告白〉への信頼が認められる。

その際〈近代的自我〉の確立が果たせなかった未熟さは、第二次世界大戦の経験まで西洋のような革命による大きな社会変化を経験してこなかったことに起因すると説明される。日本における〈近代〉は明治以降の産業化・西洋化をキーワードとしており、革命などの大きな社会変化によって他国の手本なく自ら急速に変らざるをえなかった西洋の〈近代〉化と意味合いが異なる。西洋では革命による個人の力では抗えないほどの社会変化を経験した人々が〈社会の中の個人〉という意識を強くもつようになった。すなわち〈近代的自我〉のもとである西洋では、〈他者〉との相違を明瞭に意識した自他の関係性を俯瞰的に観察する目の必要性が十分自覚されていたのだが、戦前までの日本文学には鷗外や漱石などの例外を除き、その意識が乏しかった。〈告白〉文学は自己を捉えなおす内的な語りが主旨だが、西洋的な理想としてのその観察眼には、日本での実態とは異なるものの、〈他者〉との関係性の俯瞰的な理解が前提とされている点は留意しておきたい。

右と並んで大正以降の日本は、精神分析や〈性〉をめぐる科学をも西洋から吸収した。ゾラが『居酒屋』（一八七七年）などに表現した人間の本質としての獣性、大正期から昭和初期にかけてクラフト・エビングの紹介により専門家のみならず一般の人々にも知られるようになったいわゆる「変態性欲」に関する言説や、〈性〉を遺伝という観点から論じる優生学などがその具体例である。特に日本文学に大きな影響を与えたのはゾラなどの自然主義の存在であろう。自然主義は日本において私小説などの〈告白〉する文学を生み出したが、自然主義から始まったのはそれ

のみではない。性的欲望が人間の本質の一つだとする考え、〈真理〉の追究を重視する姿勢もまた自然主義以降の文壇において一般化した。西洋をモデルとした〈近代〉化と科学の移入を図る中で、日本は〈性〉が人の主体を表すとする西洋同様の認識⁽⁴⁾を深めていったのだ。

このようにフーコーが論じた〈性の告白〉と告白者の主体の生産の機構が、『仮面の告白』発表当時の日本においても成立していたと指摘できるのである。

3 「読者」の存在により完成される〈告白〉

フーコーの『知への意志』(前掲)が指摘した告白は一般的な広義の〈告白〉行為のみを指す。では虚構性を内包する文学形式の内におかれる『仮面の告白』の〈告白〉に照明をあてた時、どのような構造が見出せるだろうか。

『仮面の告白』に対して現在与えられている創作的な告白体小説としての評価は、創作性に文学の意義を認める今日的な価値判断を基盤としている。だが、『仮面の告白』発表当時の日本の文壇はこれと異なる文学観に立つてこの作品に高い評価を与えた。高評価の主な要因は、作者の赤裸々な〈告白〉であり、中でも同性愛指向という〈性の告白〉を行なったと認識されたことにあった。例えば、荒正人は「若きエロスの告白『仮面の告白』」(『図書新聞』一九四九年七月二十三日)において「題名の示す通り作者の幼年時代から現在に至るまでの体験を告白の形式で述べたもの」だと書いている。

また、本多秋五も『物語戦後文学史』(新潮社一九六六年三月)において「ここまであからさまに真実を書いてよいものか、と思うほど赤裸々に真実が語られている」(p.376)と述べており、『仮面の告白』を三島本人の生活体験

や性指向の〈告白〉として認識している。

三島は『仮面の告白』以前にも「煙草」(一九四六年六月)などで、自身の生活体験に即した作品を書いていた。だがそれらの作品群の中で作者の〈告白〉として同時代の文壇に認識され、高く評価されたのは『仮面の告白』が初めてである。戦後、作品発表の機会を得るため奔走する三島の「煙草」を含む作品群に対して、中村光夫が低評価を与え、雑誌掲載を断った話は有名だ。だが同じ中村が、三年後の『仮面の告白』には「青年らしい見栄と銜ひに飾られた」「少年期の回想」(三島由紀夫小論)『昭和文学全集第二十三巻』角川出版一九五三年十月)と述べ、高評価を与えたのだ。また三島との対談『人間と文学』(講談社一九六八年四月)では以下のように述べている。

中村 はたから見ていると、やっぱり日本の作家は、何かの形で告白しないと人が作家と見てくれないという
 ような妙なものがある。そういうことをしないう人がかりにいるとすれば、それは大衆作家になるかそれ
 とも素人で、作家が、読者に親しまれるには告白が要る。あなたの場合にも「仮面の告白」というのが
 あるわけだ。(中略)

中村 たいへん政治的、レトリック的告白だけでも、やっぱりあれでもって……。

三島 みな信用した。

中村 仲間に入れた。ぼくなんかも自分でそう思った記憶があります。(『全集四十巻』p.88・傍線引用者)

右に示したように『仮面の告白』発表時の文壇の風潮として、私小説的な内容は特に期待されていた。右の対談は一九六七年のことであり、この時点の中村は『仮面の告白』を告白体小説として認識している。しかし約二十年前を回想して、当時文壇を代表する一人であった中村もまた、作家に〈告白〉することを望み、『仮面の告白』をそのような作品として一度は認識していたと述べているのだ。

『仮面の告白』により、文壇を含む全ての読者の内に「三島由紀夫」という作家像が確定し、その印象で三島の他の作品も読まれるようになった。本多秋五は『物語戦後文学史』(前掲)で、終戦から一九四八年四月までに発表された三島の短編(「軽王子と衣通姫」、「夜の仕度」、「春子」、「サーカス」、「殉教」、「家族合せ」)は『仮面の告白』があらわれた後、そこからの反照で読むとき、はじめて了解の糸口がえられるようなもの」(p.368)だと述べている。先述したように、本多は『仮面の告白』が三島本人の「赤裸々」な「真実」を書いたものだとして受け止めていた。その認識を基に作家像を確定し、「三島由紀夫」という人物やその世界観を理解したとする右の言説は、前述したフーコーの説のとおり、同性愛指向やアブノーマルな性指向の〈性の告白〉をしたことで告白者としての三島由紀夫の主体、この場合には読者が作品から読み取った三島由紀夫というパーソナリティが認められたのだと理解されよう。こうした〈告白〉によって他者が告白者の主体を認める機構を指して、『知への意志』(前掲)は「人間の《assujettissement》〔服従＝主体・化〕」(p.79)と述べ、その背景に潜む支配関係を示唆している。

従来『仮面の告白』研究における〈告白〉の扱いはその真偽性や動機、手段、因果など、告白者自身へと収斂される論じ方が多い。だが〈告白〉が〈告白者―読者〉間に現出したものである以上、〈告白〉は告白者のみの範疇におさまる問題ではない。この場合、重要になるのは〈告白〉を巡る〈告白者―読者〉の関係性であり、本作品が発表当時、作者の〈告白〉として当時の文壇を主導する位置にあった中村光夫のような批評家達に認められ、受け入れられた結果に注目する必要があるのだ。

鈴木登美は『語られた自己』(大内和子・雲和子訳、岩波書店二〇〇〇年一月)において、私小説とは「対象指向上、主題上、形式上の何らかの客観的な特性によって定義できるようなジャンルではな」(p.10)く、「読者が当のテキストの作中人物と語り手と作者の同一性を期待し信じることが、そのテキストを究極的に私小説にする」(p.10)

ものだとし、〈告白〉の受取手である読者の優位性を指摘している。

フーコーもまた『知への意志』(前掲)において、「告白に対して、彼(聞き手・引用者注)の権能は、単に告白がなされる前にそれを強要したり、口に出して語られた後で、裁決を下すことだけではない。告白を通じて、そして告白の隠れた意味を解説することによって、真理の言説を構成することなのである」(p.87)と述べている。つまり〈告白〉は告白者の行為でありながら、その内容が〈告白〉であったか否かの判断は受取手に委ねられている。フーコーはさらに、「真理は、語る者においては確かに現前してはいるが不完全であり、自分自身に対して盲目であって、それが完成し得るのは、ただそれを受け取る者においてのみである」(p.87)と、〈告白〉における受取手の優位性を指摘しているが、このことは『仮面の告白』を巡る文壇評価にまさしくあてはまる。本作品を契機に三島由紀夫という作家像が確定し、三島は作家としての確固たる地位を築いた。換言すれば、私小説のような作者の〈告白〉を期待する文壇の態勢の中で、『仮面の告白』を作者の〈告白〉として当時の文壇が認識した結果こそが、『仮面の告白』を作者の〈告白〉として規定した。このように文壇を含む読者の反応が、『仮面の告白』を〈告白〉として成立させるために助け支える役を担い、その助力によって〈告白〉が完成したのである。

4 「私」の〈告白〉の構造

①読者に対する「私」の要求意識

フーコーは『知への意志』(前掲)で〈告白〉における「権力の関係」(p.80)を示唆し、「少なくとも潜在的にそこに相手がいなければ、告白はしないもの」(p.80)であり、〈告白〉の受取手は「単に問いかけ聴き取る者である

だけではなく、告白を要請し、強要し、評価すると同時に、裁き、罰し、許し、慰め、和解させるために介入してくる裁決機関」(p.80)だと述べている。

『仮面の告白』の「私」が語る〈告白〉においても当然、「私」が受取手として想定する読者の存在が不可欠だ。そして読者に「裁決」されて初めて〈告白〉が完成する以上、「私」は読者を納得させるような〈告白〉を構成し、語らねばならない。

坂部恵が「かたりとしじま——ポイエーシス論への一視角」(『ペルソナの詩学』岩波書店一九八九年八月)⁵⁾において指摘した、〈語り〉と〈騙り〉の同音が示すごとく〈語り〉には常に偽りの可能性が潜む。坂部の論は日本語の言語空間における指摘だが、フロイトの言う「心的現実」⁶⁾の概念が同様のことを示すようにことは日本語に限らない。〈語る〉行為には、語り手が提示したい語りの事柄を選択できる自由が常に保持されているのだ。この自由には事柄の選択以外に、事柄の配列や意味づけなど語りの構成も含まれる。〈告白〉の成立には受取手が優位を示すのと対照的に、〈告白〉が語られる段階では告白者イコール語り手が受取手に対して優位に立つ。そこで本項では「私」の叙述の特徴から、〈告白〉を巡る読者との関係性において「私」が読者に抱く要求意識を汲み取っていく。

第一章では、自身の性指向が幼少期から根付いた本然のものだと読者を納得させるために、「私」が「糞尿汲取人とオルレ안의少女と兵士の汗の匂ひ」(『全集一卷』p.189)と「松旭斎天勝とクレオパトラ」(p.189)のエピソードを「二種類の前提」(p.189)として採用している。

また第三章では「バスの女車掌」(p.252)に関する少年期の「私」の「些か肉感的な言草」(p.252)に対し、語り手「私」が「これを読んである人にだつて明白であらう」(p.252)と読者に向けた語りを行なっている。その少年期の「私」の発言の原因について、語り手「私」は「それはまことに単純な理由、私が女の事柄については他の少年がもつて

あるやうな先天的な羞恥をもつてゐないといふ理由に尽きるのである。」(p.252・傍線引用者)と述べるが、その「単純な理由」は具体的に「外への見えざる表はれ」[erectio]を起すやうな対象」(p.255)が「私」と他の少年たちとは異なっていたという叙述へと結びついていく。言うなれば「バスの女車掌」のエピソードはその結論を引き出すために選ばれ、叙述された内容なのだ。

以上の例から、「私」の語りの構成には「私」がアブノーマルな性指向の持ち主であると読者にも了解させようとする「私」の積極的な姿勢がうかがえるのである。

他にも「私が現在の考へで当時の私を分析してゐるにすぎないといふ謗りを免れるために、十六歳当時の私自身を書いたものの一節を写しておく。」(p.253)や「私が第二章で、わざとのやうに、いちいち erectio penisのことを書いておいたのは、このことと関わりがある。」(p.255)といった叙述から、「私」の語りに対する読者の反応を予想した上で読者に首肯を促す「私」の意思が透かし見える。加えて「ヒルシュフェルト」(p.205)の学説など、第三者の言説の利用も「私」の叙述の特徴であり、そうした点からも客観的冷静さを担保することで自身の主張の正当性を示そうとする「私」の意図が汲み取れる。

以上のように、読者の納得を得るための誘導的な叙述構成からは、自身の叙述が正当な〈告白〉であると読者に承認させようとする「私」の姿勢が見える。そしてその承認の対象となるものこそが「私」の〈告白〉の本質であり、偽らざる〈真理〉として「私」が読者に認めさせようとしているものなのだ。

② 〈告白〉の本質

では「私」が〈告白〉を通して読者に承認を求めるものとは何か。「私」の半生の根源的象徴として叙述される第

一章で、「私」は先人の言説を自説に取りこみ、以下のように語っている。

私が幼時から人生に対して抱いてゐた観念は、アウグスティヌス風な予定説の線を外れることがたえてなかつた。いくたびとなく無益な迷ひが私を苦しめ、今もなほ苦しめつづけてゐるもの、この迷ひをも一種の墮罪の誘惑と考へれば、私の決定論にゆるぎはなかつた。(p.105・傍線引用者)

アウグスティヌスの予定説は、全てが神の恩寵によるとする恩寵論を基盤としており、人の自由意志を認めるものの、創造物の一つである人間の個々の気質や生涯の行動すら神は全て予見している⁽⁸⁾と考える。「私」の叙述は、人間個々の先天的素質を神の予見に値する絶対的なものとして扱うのだ。

「私」の〈告白〉では先天的素質、特にアブノーマルな性指向が、「私」に生来的に備わった主体の要として「私」に認識されており、そのことが読者への主張ともなっている。先の引用の「無益な迷ひ」とは、そのような「私」の生来的素質を根本的に変えようとする試みを指す。「私」はその「迷ひ」を「無益」と認識する一方で、自身が語る現時点でも「迷ひ」は「私」を「苦しめつづけて」おり、続く「この迷ひをも一種の墮罪の誘惑と考へれば、私の決定論にゆるぎはなかつた」とする叙述からは、アブノーマルな性指向の先天的保有者としての「私」の主体の明確化を図るため、読者のみならず自身に対しても言い聞かせる「私」の意思がうかがえる。

以上のとおり、「私」が語る〈告白〉は承認を要請する主体の像を予め想定しながら、語る間にも「私」自身に「迷ひ」があると指摘できる。こうした「私」の隠された逡巡に留意し、次項では他者が行なう「私」への〈告白〉に視点を移して論じる。

③ 他者の要請との相違

『仮面の告白』には「私」の〈告白〉に内包される形で、他者を告白者とする(他者―「私」)間の〈告白〉が三例ある。一つ、第三章における戦時下の園子からの「愛の告白」(p.295)、二つ、「大学で親しくなった友人」(p.337)からの「悪所通ひ」(p.338)の〈告白〉、三つ、戦後になり逢瀬を重ねる「私」に対して園子が語りかける「ものぐさな告白」(p.358)である。ここでは「私」が容易に同意しかねた二つ目、と三つ目の例に照明をあてる。

二例目の「悪所通ひ」を持ちかける友人の〈告白〉に対しては「御定まりの焦燥」(p.338)が、三例目の「言ふべからざることを言はうとしてゐる」(p.338)園子の〈告白〉に対しては「この資格なり権利なりを、どう動かし、どう否定し、またどう肯定することができよう」(p.358)とする戸惑いが、「私」の所感として述べられている。それらの所感の原因は、特に三例目において「彼女(園子・引用者注)の良人に些かの嫉妬も感じ」(p.358)ない自身のアブノーマルな性指向にあると「私」は語っている。だが実際のところ、性指向自体が他者からの〈告白〉を「私」に拒ませているよりも、「彼の目に映つてゐるやうな私の状態と、現実の私の状態」(p.338)が異なっている点に重きが置かれて語られている。

〈近代〉において〈性〉への言及は極力避けねばならないという暗黙の了解から、却って〈性〉に関する発言は重大性を増した、とは『知への意志』(前掲)に説明されていることである。それが個人の主体を〈性〉が象徴することへと最終的に繋がるのだが、その際の〈告白〉はフリーコーが〈告白〉に「内在する権力構造」(p.81)と指摘した社会の抑圧下で行なわれるため、受取手に対して心理的に下位に位置する者から発せられることになる。それゆえ〈告白〉は「要請され強制された言葉として、何らかの絶対的な強制によって」(p.8)暴かれるようにして現出するとフリーコーは述べている。先の二例は、それぞれ「悪所通ひ」と不倫という性的な事情を引け目や罪悪感とともに内心に

抱えた者たちの〈告白〉である。彼らはそのことを〈告白〉すると同時に、「私」を「悪所」への相伴や不倫関係の相手という共有者として呼び掛けていると言える。だが「私」は友人と同様の異性に対する肉欲的関心がもてないため「悪所通ひ」の仲間という友人の共犯意識に比べられず、同様の理由で、園子の愛と「受洗」(p.358)という園子からの決別宣言に対する承諾や説得という期待される役割を担えないのだ。

この二つの〈告白〉に関して、「私」の目を通して叙述される、「私」に対する告白者の役割要請という観点から確認してみよう。「悪所通ひ」に誘う友人は、「私」を「童貞と見きはめ」(p.338)た上で「のしかかるやうな自嘲と優越感」(p.338)を感じさせる様子だと「私」は叙述している。そして「悪所通ひ」を躊躇する「私」の様子を見て、友人が「今の私の心理状態がすっかり彼には読め、ちやうど今の私と同じ状態にあつた時の彼自身を思ひ出す羞恥の気持が、私からはねかえつてくると謂つた面持」(p.338)だったと分析している。実際、友人がそのように「私」を見ていたかは定かでない。だが「私」の認識においては、友人が友人自身の過去と共通する主体を「私」が備えていると判断し、相伴の誘いによって暗にそのような〈主体化〉を「私」に要請していると理解されており、実情は異なってもその要請に「私」も従いたいという意思が見てとれるのである。

他方、園子においても同様のことが言える。園子に対して「僕は君を尊敬してゐる」(p.357)と発言したように、「私」は「僕」と「君」の区別により心理的距離を示しながら園子に語りかけている。だが「未来の罪」(p.357)に言及した園子は「お互ひ」(p.357)の語を口にしており、不倫の共犯意識や相思相愛の恋人の役割を「私」に対して園子が要請しているものとして、語り手「私」は叙述している。対する語られた当時の「私」の反応は、「今はどうなの?」「今は誰のことを考へてゐるの?」「それでは今はどうなの?」(p.358)といった彼女への問いかけが並ぶ。「今」の園子の心情を問うことで「私」との心理的距離があることを再度示し、「私」が感じとつ

た園子が望む「私」の〈主体化〉の在り方を拒もうとする姿勢が見えるのだ。

これら他者の〈告白〉をめぐる叙述から、受取手としての「私」の役割を二人の告白者が要請していると「私」が強く感じ取っていたことが浮き彫りとなる。他者による役割の要請とは社会を含む〈他者〉との関係性を重視したものであり、すなわちフォーコーが指摘する〈従属イコール主体・化〉の機構に則った主体の示し方を要請するものである。語られた当時の「私」は、そのような〈他者〉が要請する「私」の主体化の在り方と本来の自分自身を、可能な限り「ぴつたりと一つのものになりたい」(p.338)と思いい、そう努めたのである。だが語り手「私」がアウグスティヌスの予定説を持ち出したように、要請の具体的内容の主要な一つである性指向は本人の努力次第で克服されるものではない。演じたくとも演じきれない自身の発見とは、それこそ「私」の主体の一端を示すものだと言えよう。

以上、〈他者〉の〈告白〉に対する「私」の叙述によって、先天的素質としての性指向の自認に加え、〈他者〉が要請する主体化の在り方と、「私」がとらえる自身の主体の相違を指摘した。

本稿4に論じる語り手「私」の主体は、本稿3に論じた作者三島の主体同様、『仮面の告白』の〈告白〉を巡る読者との関係の中で生産されつつある、あるいは生産された告白者の主体であり、本作品に叙述される〈告白〉はどのように、視点の置き換えによって作者と語り手「私」に各々作用する機構を見出すことが可能なのだ。

読者の「裁決」や承認を求める〈告白〉である以上、「私」の〈告白〉も本稿3同様、〈主体化〉イコール社会への〈従属化〉の図式を内包するということをここで改めて述べておきたい。

④ 「悔恨」と「演技」

第一章のアウグスティヌスの予定説の話題から程なく、「罪に先立つ悔恨」が「後年の主題」(p.188)として言及

される。すなわち、松旭齋天勝の扮装をした幼い「私」を見て目を伏せた母に対し、「罪に先立つ悔恨」といふ後年の主題が、ここでその端緒を暗示してみせた」(p.188)のかと語り手「私」が叙述するエピソードである。再度この問題に直面するのは、「最初の一瞥からこれほど深い・説明のつかない・しかも決して私の仮装の一部ではない悲しみに心を揺ぶられ」「罪に先立つ悔恨」(p.279)を意識した、第三章の園子との出会いにおいてだ。

〈母親—「私」〉、〈園子—「私」〉の關係が、差異こそあれど、互に愛情を抱く關係であったことは明白だ。「罪に先立つ悔恨」は、相手が「私」を愛し、また「私」も相手に対して特別な愛情を抱いている關係の中で生まれる。つまり「悔恨」は愛する者の期待に副えない「私」の罪悪感を示していると言えよう。「私の存在そのものの悔恨」(p.279)と叙述されるごとく、「私」は「罪に先立つ悔恨」に言及することで生来的に備えるアブノーマルな性指向を入口とした、「私」の主体という問題に踏み入っているのだ。

『仮面の告白』には「仮面」を装着した「演技」者としての「私」に言及する叙述がある。第一章において、従妹の家で「私」が「一人の「男の子」であることを要求された」(p.193)ように、本作品の「演技」の語は社会を含めた〈他者〉が要請する〈主体化〉の在り方に「私」が副おうとする場面に用いられる。それが「心に染まぬ演技」(p.194)であったと「私」が述べるとおり、「私」の実情とそぐわないため、「演技」が「私」の主体として定着することはないと「私」は理解しているのだ。アウグスティヌスの予定説やヒルシュフェルトの言説の援用による先天的素質の強調は、〈他者〉の要請に対する「私」の明確な意思の表われである。「私」の〈告白〉は、i「私」がアブノーマルな性指向を備えており、iiそれは先天的素質であるがゆえに「私」を含めた誰にも変えることができない、iiiなぜなら誰にも変えられない「私」こそが「私」の主体だからである、という叙述過程を辿る。この時アブノーマルな性指向は、「私」の主体を構成する主要な要素の一つである。だが同時に「先天的」の語がもつア・プリオリな性質を、

他者に反論の余地を与えず「私」の主調を支える論理の道具としても活用しているのである。

語られる「私」においては、〈他者〉が提示する「私」の主体の在り方が「私」自身の内に形成される主体に先行して用意され、「私」は「仮面」や「演技」の語で叙述するごとく、社会への〈従属化〉イコール〈主体化〉を図ろうとしていた。一方〈告白〉する現在の「私」は、〈他者〉に阿り「演技」していた・語られる「私」と異なり、自身の思考から浮かび上がった自己像によって主体を形成し、〈告白〉を通して〈他者〉にその承認を求めるのである。

⑤ 必要とされる〈告白〉内容

フーコーは『知への意志』(前掲)で、〈告白〉の在り方が、他者の承認による「身分、本性、価値の保証としての」告白「[たとえば告解]」(p.76)から、告白者による「自分自身の行為と思考の認知としての」告白「[告白]」「[告白]へと移」(p.76)り、告白者の語りによって「他人が彼(告白者・引用者注)を認証する」(p.76)ように変化したと述べている。フーコーの指摘と同様に、「私」も自身の主体を求めて「自分自身の行為と思考の認知」を叙述し、〈告白〉を行なっている。本項に至るまでの論述からも、「私」の性指向を表明することのみが、主体を形成する〈告白〉の要ではないことは明らかだろう。それでは主体を求める「私」の〈告白〉において、読者の承認を得るために必要な告白内容とは何であろうか。

本稿2に先述したフーコーの〈近代〉における文学の変容の指摘、「真なるものへの根本的な関係を」(p.77)「移ろいやすい数多の印象を通じて意識の根本的な確実性を解き放つてくれる、自己の検討というもののなかに求める」(p.78)と「こう言葉を思い出してほしい」。

つまり「私」が告白者として自らの思考の軌跡をつぶさに叙述することは、「私」の性指向自体の叙述に勝って、〈告

白を完遂するために重要性を帯びるのだ。その証左として、以下の叙述を示す。

私のここまでの叙述があまりに概念的にすぎ抽象的に失してゐると責める人があるならば、私は正常な人たちの思春期の肖像と外目にはまつたくかはらない表象を、くどくどと描写する気になれなかつたからだと答へる。他はない。私の心の恥部を除いたなら、以上は正常な人たちのその一時期と、心の内部までそつくりそのままであり、私はここでは完全に彼らと同じなのである。(p.264・傍線引用者)

右の叙述で「私」は、叙述されない「私」の事情は一般的な同年代の人々と同じだと主張している。叙述する主たる内容は「私」が周囲と異なるアブノーマルな性指向を持つことであり、またそれゆえ〈他者〉が要請する〈主体化〉を果たせずに生きづらさを抱くことである。しかしその〈告白〉は、「概念的すぎ抽象的に失してゐる」「私の心の恥部」に焦点を合わせている。その一点を除けば「正常な人たちの思春期の肖像と外目にはまつたくかはらない」だけでなく、「心の内部までそつくりそのまま」だと念を押して「私」が叙述するとおり、性指向自体の暴露に限らず、その内情として積み重ねる「私」の思考の軌跡もまた、「私」の〈告白〉を構成する主要な要素として「私」が意識していることを指摘できるのだ。

「幾世紀もの間、性の真理は、少なくとも本質的な部分においては、このように自ら言葉で表わすという言説的な形態において捉えられていた。」(p.81)とはフーコーの『知への意志』(前掲)の一節だが、『仮面の告白』は〈告白〉を叙述することで、「私」が「私」を認証し、読者に対して賛同と承認を求める。「私」が生きる戦時下から終戦直後の時代は、アブノーマルな性指向の持ち主に対する差別を含む国民優生法が効力を発揮する社会だった。加えて戦時下は国家総動員体制により国が国民を管理する社会でもあり、男性は戦争に行ける健康的な身体と産児に協力できる生殖能力がなければ周囲から存在を否定されかねない時代であった¹⁰。そのような環境下において、貧弱

な身体であったために兵士として戦わず、また異性に対する肉欲が湧かないことから結婚・産児も叶わない「私」は、社会という〈他者〉から「私」が「私」であるという主体を暗に否定されていたととらえることができる。

そのような経歴をもつ「私」において、自身の存在を自身に問いかけ納得し、〈他者〉に存在を承認させることは重要な課題であっただろう。このように、「私」が〈告白〉において目指したのは、アブノーマルな性指向の持ち主である「私」の一面とその内情としての「私」の思考の集積を余すところなく掬いあげて、「私」という主体を形作り、告白者・受取手の双方がそのことを承認することだと理解することができるのである。

「私」が想定する読者の反応が叙述には含まれておらず、その観点から言えば、「私」の〈告白〉は受取手の承認を待つ生成途中の〈告白〉だと言える。しかし現実世界における読者が「私」の背後に作者の姿を透かし見ることで、「私」が想定する読者の代替として、本稿3の〈作者―読者〉間同様に「私」の〈告白〉をも現実の読者が承認した。作者三島由紀夫と語り手「私」をあたかも渾然一体の存在のように感じる機構は、以上のとおり説明できるのである。以上、本稿はフーコーの『知への意志』を援用することで、従来、告白者のみに収斂される論じ方の傾向があった『仮面の告白』の〈告白〉の論点を、〈告白者―受取手〉間及び告白者と社会の関係性に設定し、〈告白〉を巡って読者との関係性の中で生産される二つ(作者三島と語り手「私」)の主体を、〈告白〉の機構を明らかにしつつ論じた。

注

- (1) 写実とは『仮面の告白』発表当時に中村光夫らが与えた、作者の実像がうかがえる私小説的な評価であり、創作とは後年リアリティ井上隆史ら研究者が見出した、虚構の告白体小説としての評価を指す。詳述は本稿3、注2に譲る。フィクション

- (2) 田坂昂は『三島由紀夫論』(風濤社一九七七年増補二〇〇七年新装 p.83)で「仮構の告白体小説」という言葉で〈告白〉の創作性を指摘している。井上隆史は「豊饒なる仮面三島由紀夫」(新典社二〇〇九年五月 p.91)で「私小説という形式に見かけの上では則りながら、その実、私小説が暗黙の内に方法論的前提としている「告白」に対する作家—読者両者による全幅の信頼」に輝を入れようとすもの」だと述べ、私小説という当時の主流に則りながら仮構の〈告白〉を行なったと指摘している。
- (3) 本稿において三島の本文の引用は全て『決定版三島由紀夫全集』(新潮社二〇〇〇年十一月—二〇〇五年十二月)に拠る。なお『仮面の告白』本文はページ数のみ、その他に関しては『全集〇巻』p.〇〇と示す。
- (4) 鈴木登美は「語られた自己」(大内和子・雲和子訳、岩波書店二〇〇〇年一月)で、近代日本文学における〈真理〉〈自己〉〈愛〉〈性〉〈自然〉といった〈告白〉文学に関連する概念が西洋的な認識を基準としていること、日本の近代以前から存在する〈愛〉などの語と同一の記号表現でありながら記号内容を西洋的な認識へと徐々に変化させたことを指摘した。その他、本稿の私小説論に関する叙述は榎原修の「私」という方法——フィクションとしての私小説』(笠間書院二〇二二年十二月)も参照した。
- (5) 初出は『新岩波講座哲学—いま哲学とは』(一九八五年)。
- (6) フロイトの「心的現実」とは、患者が語るエピソードが客観的に判断して虚偽だと判断されても、患者自身にとってその内容は〈現実〉であると言えることを指す。
- (7) 本稿における「アブノーマル」の語は、『仮面の告白』本文で、「私」が自身の性指向を「常規を逸した欲望」(p.233)や「倒錯愛」(p.255)と認識し、「正常なもの正統なもの」(p.233)ではない異常なものとして叙述していることを示すためのものであり、本稿論者の価値観を反映したものではない。当時の社会における差別的認識を暗に示す語でもあるが、同時に「私」においては、「ノーマル」から離れるという認識が、他者と異なる自身の個性の発見という価値の転換に繋がり叙述が構成されていると論者は判断し、「アブノーマル」の語を用いている。
- (8) アウグスティヌスに関しては速水敬二『古代・中世の哲学』(筑摩書房一九六八年六月)、宮谷宣史『アウグスティヌス』(講談社二〇〇四年八月)、岡野昌雄『アウグスティヌス『告白』の哲学』(創文社一九九七年十月)を参照した。
- (9) 本稿で述べる特別な愛情とは、第四章で「正常さへの愛、霊的なものへの愛、永遠なものへの愛」(p.353)と叙述される

ような肉欲的でない愛情を指す。

(10) 『仮面の告白』における戦時下から終戦直後の社会の関係、特に「私」の性指向と社会背景の関係については、拙稿「三島由紀夫『仮面の告白』論…社会背景から考察する「私」の生きづらさ」(『聖心女子大学大学院論集』四十七号二〇一四年十月)で論じた。

(11) 心理学者、望月衛「性的成熟と社会的成熟」(『思索』一九四九年十一月)には、「ある知識階級の青年」が『仮面の告白』に抱いた感想が記されている。彼は「自分と同様の苦しみに悩む者」として『仮面の告白』の「私」に共感を示す一方、「私」のごとき性的指向の持主として作者を断定し、そのような作者の「無類の正直さと勇氣」を示す作品だと感じたという。「私」の主体と同時に作者の主体をも承認した、同時代の読者の一例と言えるだろう。